

## 現代中国におけるキリスト教

王 再興

---

### 要旨

改革開放路線への転換から30年、中国は世界最速の経済成長を遂げてきたが、同時期この国のキリスト教人口も近代史始まって以来のペースで増加を続けている。この2つの現象の間には、何か内部的、必然的なつながりがあるのだろうか。あるとすれば、その理由は何であろうか。そしてこの共産主義大国におけるキリスト教の現状はどのようなものか。本稿では、中国のキリスト教人口、中国の政教関係、現代中国におけるキリスト教の試練と好機という3つの側面から考察を加えてゆく。

キーワード：中国キリスト教史、キリスト教人口、政教関係

言うまでもなく、キリスト教は世界最大にして最も重要な宗教である。一方、中国は世界一の人口大国であるが、伝統的なキリスト教国ではない。この2点を同時に取り上げれば、宗教学上非常に意義深いテーマになるのではないだろうか。急速にグローバル化する世界の中で、中国がしばしば「台頭する大国」の名で呼ばれる今こそ、このテーマに注目し、考察を深めることがいつにも増して求められているように思う。

本論では、中国のキリスト教人口、中国の政教関係、現代中国におけるキリスト教の試練と好機の3点について簡単に触れたいと思う。ただし私の研究対象が限られているため、本稿で「現代中国」という場合は、1980年代から現在に至る期間、いわゆる「改革開放政策施行後の30年」とほぼ重なる期間の中国本土のみを指すことをあらかじめお断りしておく。

---

### 中国のキリスト教人口

現代中国のキリスト教には、プロテスタント教会、ローマ・カトリック教会、東方正教会の3つの伝統的宗派がある。しかし広く知られているように、ロシア東方正教会が信仰されているのは、中国北部の黒龍江省や内蒙古、新疆少数民族地区、または北京や上海の外国人居住区に限られており、中国の膨大な人口に比べると信者の数は余りに少なく、宗教集団としての存在感は薄い。そのため現在の中国本土では、キリスト教といえば一般的にローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の2大宗派を指すものと理

解されている。

現代中国のキリスト教に関する最も基本的な問いと言え、中国にはどれくらいのキリスト教徒がいるのかということだろう。現に研究者の間ではこの点がしばしば問われ、議論されている。しかし残念なことに、私の知る限り、この問いに答えられるだけの公的な統計データや資料は存在していない。というのも宗教的アイデンティティ、特にキリスト教徒のそれは未だに政治的に微妙な問題を含んでおり、中国の国勢調査でも個人の信仰は調査対象から外されているからで、全国的な信者の状況については信頼に足る正確な統計が取られていないのが現状である。もっとも最近では、一部の公的機関や独立機関や個人の研究者などがこの問題に関するサンプル調査やフィールド研究を実施している。ただしその結果には大きなばらつきがある。

いずれの調査元も調査結果を公にしており、それぞれが大局を把握したと主張している。中国社会科学院（CASS）発行の「宗教藍皮書（宗教青書）：中国の宗教に関する年次報告書（2010年）」によると、中国のキリスト教人口はおよそ3000万人で、そのうち2300万人強がプロテスタント、およそ600万人がカトリックだという。なおこの数字には、洗礼を受けていないが、習慣的に教会に通っている信者の数が一部含まれている<sup>1)</sup>。同報告書には、この数字は全国的な人口調査の結果であり、登録の有無を問わず全国の教会を考慮の対象としたと書かれているが、中国内外の研究者は概してこの結果に懐疑的である。一番単純な理由は、この種の公的機関による調査が果たして中国人キリスト教徒一とりわけ未登録の家庭教会の信者一から十分な回答を得ることができるのか、またその回答がキリスト教徒の声を代表しているのかが疑問視されているからである。中国では、宗教的アイデンティティは未だに政治的に微妙な問題をはらんでおり、特にキリスト教の場合は伝統的な中国の宗教と較べてはるかに難しい立場にある。それでも一般的には、CASSの公表した結果は、中国のキリスト教人口を最も少なく見積もった数字と捉えられている。

一方で、一部の独立機関や個人の研究者が実施した調査や研究では、これよりもずっと楽観的な数字が報告されている。たとえばアジアで活動する無宗派のキリスト教会、アジア・ハーベストは、2010年の報告の中で、中国本土には、年齢を問わず1億400万人のキリスト教徒が存在すると述べている。これは中国の総人口の8%近くに当たる。また北米の代表的な福音派メディア、クリスチャニティ・トゥデイのオンライン版は、中国のキリスト教人口は現在までに1億3000万人に達しているはずだと伝えているが<sup>2)</sup>、この数字は今のところ最も強気な予想である。ただし、この2つの数字はいずれも、成人に達していないキリスト教徒の子女を数に入れており、この点に留意が必要である。

CASS が半ば公式データとして発表している最も控えめな数字とクリスチャニティ・トゥデイの強気の見通しの間に幾つかの穏当な数字が公表されている。中でも私が合理的と考えるのは、有名なアメリカの無党派シンクタンク、ピュー・フォーラムの予想である。このシンクタンクは2011年末の報告で、中国のキリスト教人口を総人口の5%前後と見積もっている。すなわち年齢を問わず中国国内に6700万人前後のキリスト教徒がいるという計算になる。なおこの数字には、中国人信者の未成年の子女、ならびに洗礼は受けていないが礼拝に通っている信者の数が含まれている。

以上、中国のキリスト教人口について3段階の予想を紹介した。いずれの数字もそれなりの根拠に基づき独自の方法によって導き出されたものであるが、中国には未登録の教会が多数存在し、その実態を把握することは暗闇の中で象の全体像を把握するにも等しい難事であるため、どの数字が真実に近いのか、誰にも断言できないのが現状である。

疑問に感じる向きもあろうかと思われるが、私がこのように考える根拠はもう1つある。中国では、愛徳印刷有限公司という印刷会社が政府の認可を受けてプロテスタント教会用の聖書を印刷しているが、同社は1987年の創立時から2011年末までに9000万冊近い聖書を印刷したと報告している。その内訳は中国本土の教会向けが5600万冊、国外市場向けが3300万冊であるが<sup>3)</sup>、中国の未登録の教会にかかわった者であれば誰でも知っているように、「国外市場向けの3300万冊」は、実は香港、シンガポール、台湾等の「密輸ルート」を経て中国国内市場に逆輸入され、中国本土の未登録の家庭教会に渡っているのである。これは愛徳印刷有限公司が家庭教会に直接聖書を販売しないためである。このことから、私は少なくとも8000万冊の聖書が中国人キリスト教徒に使用されていると考えている。これとは別に、数百万冊のカトリック聖書 (Si Gao Sheng Jing) が流通している。カトリック聖書の翻訳はプロテスタント・ユニオン版とは大きく異なる。また言うまでもなく7つの第二正典が加えられている。

ここで私の個人的な体験にも触れておこう。7年前に、聖書読み宣教会の仲間の1人が成都から北京に転勤になった。北京に引っ越してきたものの、一体どこに行けば礼拝に参加できるのか分からない。ところが2度目の日曜日の朝、驚いたことに馴染み深い讚美歌を歌う声が聞こえてきたという。それも同じ集合住宅の同じ棟の一室から。私自身も6年前にこんな経験をした。四川大学の博士課程を修了して湖北文理学院に職を得た私は、四川省から湖北省に住居を移した。引っ越してから数日経ったある日、私はキャンパスの街灯に貼られた小さなポスターを見て驚いた。何とそこにはこう書かれていたのだ。「福音のことを学びませんか? 電話番号…」。

## 政教関係

---

中国共産党政府は今もなお、古代の宗教行政の伝統を受け継いでいる。中国社会科学院世界宗教研究所（IWR）所長、卓新平教授はこの状態を「政主教従」（zhèng zhǔ jiāo cóng）と名付けている<sup>4)</sup>。古代中国は、儒教と全体主義体制の融合した思想を公式イデオロギーとしていた。また儒教、仏教、道教の三宗教から成る中国の宗教・文化制度の中心に位置するのが儒教であった。1949年に中国共産党が権力を掌握してからも、秦王朝（紀元前221年－209年）に由来する古代の全体主義体制はそのまま引き継がれたが、儒教の位置は、共産主義の宗教とも呼ぶべきマルクス・レーニン主義に奪われた。こうして他の宗教はすべて中国共産党とそのイデオロギーに忠誠を誓わなければならなくなり、また宗教組織や宗教関係者は、この無神論政府により、認可・登録・許諾を義務付けられた。言い換えれば、社会主義国である中華人民共和国は、建国以来一度も、近代国際社会では当たり前になっている政教分離の原則を採択したことがないのである。

さらに清王朝時代（1636年－1911年）には、欧米植民地主義とキリスト教の布教活動がほぼ同時期に中国を席卷し、この国を大混乱に陥れ、中国史に苦い記憶を刻み込んだ。帝国主義侵略の道具として利用されたキリスト教は、現在および将来的に欧米大国による「平和的転覆」の道具になりうるものとして、毛沢東とその後継者たちから敵対視されることになった。中華人民共和国政府がキリスト教会と欧米大国の繋がりに強い警戒感を抱いているのはこうした事情による。この国では、キリスト教がかかわる宗教問題はすべて、大なり小なり国家安全保障への脅威とみなされているのである。こうした中、1950年代初頭に中国のプロテスタント教会の指導者たちが「三自愛国運動」を立ち上げ、ほぼ時を同じくして中国カトリック教会の指導者たちも「愛国反帝国主義運動」に乗り出した。「愛国」という言葉には「国を愛する」だけではなく、「中国共産党と社会主義政府に忠誠を誓う」という意味も込められている。しかし、プロテスタント側にもカトリック側にもこうした運動への参加を拒否した聖職者が大勢いた。彼らは結果的に死罪になったり、投獄されたりした。そしてそのわずか10年後にあの「文化大革命」の嵐が吹き荒れる。毛思想を妄信する集団がほぼ中国全土を狂気に陥れ、宗教という宗教はことごとく禁止された。中でも政治的に極めて難しい立場に置かれていたキリスト教は一段と厳しい弾圧を受けた。鄧小平の打ち出した改革開放政策を機に、1980年初頭から現在までに5大宗教はいずれも再開を許されたが、キリスト教だけは今もなお、1950年代の「愛国主義」を徹底し、中国共産党と中国政府の支配に殉ずることを厳しく求められている。

この国の政教関係を理解するには、中国共産党の宗教行政政策およびキリスト教に対

する厳しい姿勢に注目する必要がある。

第一に中国では、程度の差こそあれ、すべての宗教問題が政治的に微妙な意味合いをはらんでいるが、その中でも最も難しい立場にあるのがキリスト教である。そのため、政教関係は常に異常な緊張状態にある。数年前に、中国三自愛国運動委員会（TSPM）の指導者数人が『前事不忘 后事之师：帝国主义利用基督教侵略中国史实述评』（過去の出来事を忘れなければ未来を知ることができる：帝国主義侵略の道具としてのキリスト教に関する歴史的考察）と題する膨大な小論集を共同出版した<sup>5)</sup>。ここには、中国ではキリスト教が今もなお政治的に大変難しい立場に置かれている、欧米諸国との繋がりは完全に断ち切るべきである、キリスト教は依然として外国の宗教の一種とみなされている、という TSPM 指導者の心情が吐露されている。その一方で TSPM の一部の指導者からは、1950年代の愛国運動を機に中国のキリスト教は「外国の宗教」という汚名を払拭したという宣言がたびたび出されている<sup>6)</sup>。一見矛盾するようであるが、その背景には、現在の社会政治体制の中でキリスト教が存続していくためには、無宗教政府への忠誠を絶えず誓わなくてはならないという現状がある。2011年、中国共産党は創立90周年の祝典を大々的に挙行し、TSPM と中国カトリック愛国協会（CPA）に所属する教会もそのほとんどが、自発的にであれ強制的にであれ、祝賀のための特別集会を開催した。こうした祝賀行事は「中国共産党創立90周年を祝う唱紅歌」と呼ばれている。「紅歌」とは共産党政府を称える歌曲のことで、「東天紅、太陽昇」、「共産党なくして新中国なし」などがある。

しかしながら、共産党に忠誠を誓っていれば自由に祈りや礼拝ができるかということ、事はそう簡単ではない。中国人キリスト教徒の多くは、共産党を「偉大な救世主」と認めることは真の信仰生活と相容れないと感じており、いわゆる「愛国運動」への参加を拒否してきた。そのため中国では、プロテスタント教会もカトリック教会も、政府公認教会と、いわゆる「家庭教会」（プロテスタント教会の場合はこの名で呼ばれることが多い）または「地下教会」（カトリックの場合）に分裂を余儀なくされている。政府公認教会とは、政府の認可、許諾を受け、登録された教会のことで、TSPM（プロテスタントの場合）か CPA（カトリックの場合）に加盟している。一方、家庭／地下教会は、政府の認可も許諾も受けていない未登録の教会で、TSPM や CPA に所属していないため、政府からは、社会全体の団結と安定を脅かす反社会集団という扱いを受けている。2010年10月にケープタウンで開かれた第3回ローザンヌ世界伝道会議では、家庭教会の指導者200人が準備委員会から正式参加者として招待を受けたのに対し、TSPM 所属教会からはわずか8名がオブザーバーとして招かれたにとどまった。その背景にあったのは、中国の教会の大多数が家庭教会であることに加えて、三自教会がローザンヌ誓

約への署名に抵抗していたという事実である。中国政府は世界福音同盟のこの対応に強く反発し、会議の日程が近付くと何千人もの警官を国内の空港に配備して、ケープタウンに向かう招待者の出国を妨害するという暴挙に出た。その結果、招待者は誰一人、ローザンヌ世界伝道会議に出席することができなかった。また1989年の第2回ローザンヌ世界伝道会議でも、天安門事件に端を発する外交関係の緊張を理由に、中国の代表団が政府によって参加を阻止された事実も特筆すべきだろう。2011年には北アフリカや中東の一部の国でジャスミン革命が拡大したが、こうした国際情勢を受けて中国政府は警戒レベルを一段と高め、北京や上海などの主要都市の街路で小規模な民主化集会が開かれているという通報があれば即座に行動を起こし、デモに発展しそうな動きを力づくで抑え込んでいる。キリスト教徒は一般的に民主主義の擁護者とみなされているため、反政府的な動きがあると、たとえ関与を示す確かな証拠がなくても、政府は必ず家庭教会に疑いの目を向けてきた。複数のメディアが伝えるところによると、2011年には、何百人、何千人もの聖職者や信者が拘留され、尋問を受けたという。

政教関係といえば、中国のカトリック教会の場合は中国とバチカンとの外交関係が絡んでくるために、プロテスタント教会の場合よりも事態は一層複雑である。1949年に中華人民共和国が建国されて以来、北京とバチカンの間には未だに正式な外交関係が樹立されていない。障害となっているのは、主に司教叙階をめぐる対立である。2007年にローマ法王ベネディクト16世が中国のカトリック教会宛の書簡の中で「バチカンと中華人民共和国の間で、具体的な形の対話と協調が早期に実現することを期待する」<sup>7)</sup>と述べるなど、バチカン側からはこれまでに幾度となく和解の手が差し伸べられてきた。しかし中国政府は「意のままに、勝手に教会を運営しようとする」姿勢を硬化させているようで、この数年はバチカンの意向を無視して数人の司教を叙階している。これに対してバチカンは繰り返し遺憾の意を表明し、叙階を不当として司教1人に破門を言い渡したことすらある。

## 試練と好機

---

この30年の間に中国の教会は急成長し、未曾有の発展を遂げたが、これは中国が急速な経済成長を達成し、世界の中で政治的存在感を高めた時期と一致している。確かにその間にはある程度の相関関係が見られるが、最も大きな理由に挙げられるのは、伝統文化の崩壊と共産主義イデオロギーの失墜を目の当たりにした中国の国民が倫理的精神的拠り所を求めていたことである。今後中国経済が成長を続けようと停滞しようと、キリスト教には栄光に満ちた輝かしい未来が待っているというのが大方の専門家の見解である。

しかしながら、中国の教会は今多くの試練に直面している。

当面の間、中国は伝統的な政教関係をそのまま保ち続けるだろう。こうした姿勢は近代国際社会のあり方と真っ向から対立するものであり、中国が開放的で自由な近代的民主主義国家に発展する過程で大きな障害となることは間違いない。貧富の差が著しく拡大し、倫理的価値観や精神的拠り所がほとんど失われてしまった今、中国は深刻な緊張と分裂の危機をはらんでいる。このままではいずれ社会不安が助長されることは確実であり、共産党政府は近年治安維持に並々ならぬ力を注いでいる。こうした社会政治環境は、中国のどの宗教よりも政治的に微妙な立場に置かれたキリスト教にとって、不穏な空気を感じさせるものとなっている。この30年に限って言えば、中国政府はキリスト教に対して散発的に取締りを行ってきたにすぎない。しかし典札問題や義和団運動、そしていわゆる文化大革命などの過去の歴史をマクロ的に俯瞰すると、今後キリスト教が徹底した過酷な弾圧を受けないという保証はどこにもないのである。

その一方で楽観的なニュースを伝えるメディアもある。たとえばBBC特派員クリストファー・ランダウは「中国政府が信仰心の厚いキリスト教徒を支援」という記事の中で、共産党政府が中国のキリスト教の発展に尽力しており、現に「中国国内で宗教を推進するために（略）数百万ドルを」投じたと報告している<sup>8)</sup>。こうした報に接した部外者が、無神論政府がなぜ宗教をとりわけ長年敵対してきたキリスト教を一支援するのかという疑問を抱くのは当然だろう。だからこそ私は自らの義務として次の事実を伝えておきたい。中国政府が支援しているのはあくまでも TSPM か CPA に所属している教会だけであって、家庭教会や地下教会に対して政府がしてきたことと言えば、圧力をかけたり、財産を没収したり、身柄を拘束したりする以外何もないのである。中国政府は、ますます巧妙な策を弄して TSPM / CPA に所属する認可教会を懐柔する一方で、意のままにならない家庭教会や地下教会に対しては執拗に弾圧を加えてきた。しかしこうした欺瞞の裏側に隠された真実を見抜くことができるのは、陳日君枢機卿のような炯眼の持ち主だけである。彼はこう書いている。「かつて政府は脅迫や罰則といった手段を用いて弾圧を行っていた。今政府が用いるのはもっと洗練された手段である。すなわち金品（贈品、車、住居の改修）と名誉（全国人民代表大会や各レベルの政治諮問機関への参加資格、会議、昼餐会、晚餐会などへの招待）がそれである」<sup>9)</sup>。

こうした外的要因から生じる問題よりもさらに深刻なのは、教会内部に存在する問題である。中国の地方部は広大で貧しい。こうした地域では、プロテスタント、カトリックの区別を問わず、信者の大半は読み書きもおぼつかない高齢の女性たちであり、「病気を治したい」、「悪魔を祓きたい」、「日々の糧を得たい」といった願望が信心の動機となっている。一方都市部の家庭教会の信者層は地方部よりも質が高く、教育を受けた若

者が中心になっている。しかし一般的に言って、「大覚醒の時代」の欧米のキリスト教徒のように真の精神生活に目覚めた者はごくわずかであり、ほとんどの場合、「繁栄の福音」または「文化の消費」が入信の目的となっている。こうしたことから、中国のキリスト教内部で生じる最も顕著な問題は、精神性の欠如であると私は考える。

教会運営をめぐる状況も著しい緊迫感に包まれている。TSPM / CPA に所属する政府公認教会は、宣教師の支配を脱し、独立、自律、そして「国と教会への愛」を掲げる新たな時代に入ったと宣言しているが、その聖職者制度は無神論政府の支配下に置かれているため、彼らの言う「自律的支配」とは実は「国による支配」に他ならないのである。従って、教義に基づいて公認教会を効率的に運営できないのは自明のことであり、こうした教会がむしろ特殊な政府機関の様相を帯びつつあるのも当然のことだと言える。運営上の深刻な問題に直面しているのはプロテスタント教会も同じである。カトリックの地下教会がバチカンの指名を受けた司教や司祭の指揮下に置かれているのに対し、プロテスタントの家庭教会は、畑違いの経歴を持つ指導者の手で独自に組織されている。そうした教会は法的身分を持たないため、一般人の目が届かないのをいいことに、偽預言者や偽キリスト、果てには犯罪者までもが「教会」と称する組織を勝手に立ち上げている。本物の教会とまがい物の教会は見分けがつかないため、中国人の中には、キリスト教は噂に聞くほど、または書物に書かれているほど良いものではないと思込んでいる者もいる。中国政府が改革開放政策に舵を切った1980年代以降は、国内に多数のカルト宗教が誕生した（こうした動きは時に「新宗教運動」と呼ばれている）。その教義は歪曲された聖書物語や妖術や魔術の寄せ集めであり、指導者を神とあがめ、犯罪に手を染める集団すら存在する。

しかし中国のキリスト教の最も深層に内在する問題とえば、その神学的な内容ではないだろうか。20世紀前半には、趙紫宸（1888年－1979年）はじめ少数の神学者がキリスト教と中国文化を融合させようと奮闘していたが、1949年の中華人民共和国建国以来、伝統的な中国文化は急速に、絶望的なまでに忘れ去られ、中国の神学思想も本来のパラダイムを見失ってしまった。今や教会の指導者や神学者たちは、共産党政府に取り入ることばかりに汲々としている。こうした状態が続けば、いつまでたっても真の神学が確立できないのは当然である。しかしながら、たとえ社会経済環境が現体制と違っていたとしても、中国の神学が成熟するには、一、二世代の時間では到底足りないだろう。それほどまでにやるべきことは困難かつ膨大であり、中国と欧米の歴史・文化の間には深い隔たりがあるのである。中国のキリスト教会から偉大な思想家や指導者が誕生するのは、まだまだ先のことになりそうである。

しかし昔から言われているように、試練と好機は常に表裏一体であり、中国のキリス



ト教の場合もその内外から新たな好機が生まれている。

外部的要因で言えば、試練の最大の原因となっている中国の社会政治的環境の中にこそ、最大の好機が存在している。中国は改革開放路線を突き進んでおり、その流れはもはや押し戻すことができない。向かう先にあるのは信教の自由であり、また法律に則った宗教問題への対応である。中国の独特な政教関係はこの国のキリスト教にとって大きな障害となっているが、見方を変えれば、中国社会は、今後世界と共に歩んでゆく必要上、その内部に改革開放路線を推進する必要性を包含していると言えるだろう。

もう1つの大きな好機は、中国の知識人や文化人の間で、キリスト教への理解を示し、その支持を表明する者が増えていることである。中国の社会科学分野の特筆事項と言えば、上位機関である中国社会科学院（CASS：1977年創立）に先立って世界宗教研究所（IWR：1964年創立）が設立されたことだろう。またIWRの主な役割が、マルクス主義に基づく宗教批判から世界宗教の学術研究にシフトしていることも注目値する。IWRのキリスト教研究部はこれまでに15回、全国規模の年次大会を主催してきた。今やキリスト教研究は、中国の社会科学分野の重要なテーマであり、クリスチャニティ・トゥデイの報告によれば1300種のキリスト教関連書籍が合法的に出版され、一般に販売されている。そのほとんどがここ30年以内に出版され流通したものである<sup>10</sup>。文化面で言えば、中国愛楽楽団が2008年4月にローマ法王ベネディクト16世臨席の下で特別公演を行い、北京とバチカンの関係修復に向けた大きな一歩として高い評価を受けた。「音楽はすべての国境を越える」という楽団の指揮者、余隆の言葉通り、中国と欧米間の文化交流はこの先もキリスト教にとって追い風となるだろう。

さらには中国のキリスト教人口の急増が、内外の人権団体や民主化推進組織、一部のNGOに歓迎されていることも好機の1つに挙げられる。1989年の天安門事件を機に国外に逃れた民主化運動家たちが、その後も外国から働きかけを続けた結果、長城の壁に閉ざされた中国国内の知識人たちがこの国の社会が抱える人権問題や法制度上の問題に気付き始め、反体制派集団が中国の社会政治の舞台で活動を始めている。キリスト教そのものが政治的活動の目的になったことは1度もないが、社会正義や人間の究極の価値を説くキリスト教の教義は、常に社会的・政治的変革を促すきっかけとなってきた。このためアメリカに本拠を置く有名な人権団体、中国援助協会が、中国国内の人権状況の改善や信教の自由の実現に向けた支援活動を展開しており、その粘りと闘志は中国政府にとって大きな脅威となっている。また普世社会科学研究所という独立した非営利・非政府系シンクタンクにも触れておかななくてはならない。1999年に創立されたこの組織は、「法の支配の枠組み内で信教の自由を推進する」ことを目標に掲げており、公の意見交換の場として本格的なウェブサイトを立ち上げるとともに、ニュースセンターを運

営して重要な宗教研究に関するほぼすべての活動を伝えている。このシンクタンクは2010年から「宗教と法の支配」と題する夏季研修プログラムを3回にわたって実施しており（私も第1回に参加した）、これまでに200人を超える研究者や法律家、政府職員が受講している。

しかしそれよりも一層重要で注目に値するのは、内部から生じる好機の方である。そこで次に、中国のプロテスタント系家庭教会に話を移したい。

まず未登録の家庭教会が今や中国のプロテスタント系教会の大多数を占めていること、そしてカトリック教会やカトリック司教の主流派がバチカンの権威を認めているという事実からも、中国の教会が徐々に無神論政府の支配から脱し、普遍教会との距離を縮めていることは明らかである。TSPM や CPA に所属する教会が今も一部の国際的なキリスト教コミュニティとつながりを保っていることは事実であるが、もはや中国のキリスト教を代表する立場にはない。

次に、都市部の家庭教会は地方部の家庭教会を上回るスピードで信者を増やし、成長を続けている。またその信者の大部分は若者である。過去30年、中国では急速に都市化が進み、何億もの若者が出稼ぎや大学進学のために地方部から都市部へ流入した。中国国家統計局の報告によると、2011年には中国の都市部の人口が初めて地方部の人口を上回ったという<sup>11)</sup>。このような社会・経済的変化は中国のキリスト教に多大な影響を及ぼしている。正確な統計データはないが、前世紀末まではプロテスタント系教会の大半は地方部の家庭教会で占められ、信徒のほとんどは広大な地方部に暮らす恵まれない高齢女性であったと推察される<sup>12)</sup>。

さらには組織を発展させる必要上、家庭教会は神学理論の強化にも力を入れている。最近ではセミナーのクラスと公教要理のクラスを同時に開講するという中国独自のスタイルの神学校が北京、上海、広州、成都、西安などの大都市に次々と誕生しており、家庭教会で牧師職に就く者が急増している。こうした伝統的な神学校に加えて、オンラインのセミナーも開講されており、何万もの家庭教会従事者を対象に、神学の生涯教育が行われている。

加えて、教会統治の正常化に向けた新たな動きが表面化しており、中国の家庭教会が存在感を増しつつある。TSPM 所属教会の指導者たちは、既に1980年代の時点で、中国のプロテスタント教会は団結しており、すでに超教派の時代を迎えていると宣言したが、これは TSPM 側の一方的な思い込みだったようである。現時点で既に守望教会（北京）や秋雨之福教会（成都）をはじめとする一部の家庭教会が長老主義を標榜しており、今後も監督制や会衆制を採用する教会が出てくることは間違いないものと思われる。

最後に結論として私の思いを述べることをお許しいただきたい。ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世はシノドス後の使徒的勧告「アジアにおける教会」の中で、そしてベネディクト16世は中国のキリスト教徒に宛てた手紙の中で、こう語っている。新たな福音伝道においては、現代人に福音を届けることが求められている。第一千年紀にヨーロッパで、第二千年紀にアメリカ大陸とアフリカで十字架の教えが根を下ろしたように、第三千年紀は躍動する広大なアジア大陸で信仰という豊かな実りが刈り取られるであろうと<sup>13)</sup>。私はこの言葉が実現することを固く信じている。

---

## 注

- 1) Jin Zhe, Qiu Yonghui eds., *Blue Book of Religions: Annual Report on China's Religions (2010)*, Beijing, Social Sciences Academic Press (China), 2010, pp. 4, 10.
- 2) David Aikman, *Suffocating the Faithful*, <http://www.christianitytoday.com/ct/2007/december/26.58.html>
- 3) 聖書協会連合の報告による。 <http://www.ubscp.org/about/>
- 4) Zhuo Xinping, "*Global*" *Religions and Contemporary China*, Beijing, Social Sciences Academic Press (China), 2008, p. 30.
- 5) 罗冠宗, 《前事不忘 后事之师: 帝国主义利用基督教侵略中国史实述评》, 北京, 宗教文化出版社, 2003年6月, 第一版。
- 6) 中華人民共和国建国60周年を祝う中央統一戦線工作部祝賀会での傅先偉 (TSPM 主席) のスピーチを参照。 [http://www.zyztz.cn/web/qita/200909/t20090917\\_573560.htm](http://www.zyztz.cn/web/qita/200909/t20090917_573560.htm)
- 7) Benedict XVI, Letter to the Bishops, Priests, Consecrated Persons and Lay Faithful of the Catholic Church in the People's Republic of China (27 May, 2007), online: [http://www.vatican.va/holy\\_father/benedict\\_xvi/letters/2007/documents/hf\\_ben-xvi\\_let\\_20070527\\_china\\_en.html](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/letters/2007/documents/hf_ben-xvi_let_20070527_china_en.html)
- 8) Christopher Landau, *China Invests in Confident Christian*, <http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-pacific-11020947>
- 9) Cardinal Zen, *There is No Religious Freedom in China*, <http://www.asianews.it/news-en/Cardinal-Zen:-there-is-no-religious-freedom-in-China-20057.html>
- 10) John W. Kennedy, *Discipling the Dragon: Christian Publishing Finds Success in China*, <http://www.christianitytoday.com/ct/2012/january/publishing-success-china.html?start=3>
- 11) National Bureau of Statistics of China, *Changes of the Whole Population and Demographic Structure of the Country*, online: [http://www.stats.gov.cn/was40/gjtjj\\_detail.jsp?searchword=%B3%C7%D5%F2%C8%CB%BF%DA&channelid=6697 & record=18](http://www.stats.gov.cn/was40/gjtjj_detail.jsp?searchword=%B3%C7%D5%F2%C8%CB%BF%DA&channelid=6697 & record=18)
- 12) Wang Zai Xing, "the Martha Phenomenon in Christian Community and its Sociological Origin –A Field Research of the Churches in Nanchong Prefecture of Sichuan Province," *Religious Studies* (4-2009), Sichuan University, Chengdu, December 2009, pp. 129-133.

- 13) Cf. John Paul II, Post-Synodal Apostolic Exhortation *Ecclesia in Asia* (6 November, 1999), 7: *ASS* 92 (2000), 456. And Benedict XVI, Letter to the Bishops, Priests, Consecrated Persons and Lay Faithful of the Catholic Church in the People's Republic of China (27 May, 2007), online: [http://www.vatican.va/holy\\_father/benedict\\_xvi/letters/2007/documents/hf\\_ben-xvi\\_let\\_20070527\\_china\\_en.html](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/letters/2007/documents/hf_ben-xvi_let_20070527_china_en.html)